

教育支援センターと連携した校内別室における多様な支援について

不登校生徒の状況

当該生徒は、中学 1 年生の入学時から、集団生活に苦手意識をもっていた。中学 1 年生の 2 学期から、校内別室登校になる。中学 1 年生の 10 月頃から、教育支援センターと校内別室を併用するようになった。また、中学 2 年生から、学校図書館の利用、裁縫等の教科の学習以外の活動を始めた。

具体的な取組

○学習支援

2 人の支援員によって、数学と英語の学習支援を行っている。教育支援センターで学習したこと等を、校内別室で支援を受けて復習をしている。



○学校図書館との連携

週 1 回程度、学校図書館で読書をする時間を設定している。支援員と一緒に、時間を決めて、当該生徒が興味のある本を借りて、読書を行っている。



○裁縫活動

当該生徒の興味に合わせて、裁縫活動を支援内容に取り入れている。学校で活動しているボランティアの方に協力いただき、編み物などを週 1 回程度行っている。



○対話による相談支援

支援員が、当該生徒の思いを聞いた上で、今後の予定や学習内容を提案したり、学級担任や教科担任等からの学習教材を提供したりし、当該生徒の気持ちに寄り添いながら支援を継続している。また、何気ない日常的な会話を大事にして、校内別室での居場所の確保に取り組んでいる。

成果

校内別室での支援員とのコミュニケーションを図る中で、支援員以外の人とも話すことができるようになってきた。また、校内別室に毎日登校し、支援前より登校日数が増えた。支援員と学級担任が連携できており、学級担任の生徒理解にもなっている。

課題

今後は、集団での活動も徐々に増やし、教室でも級友と一緒に過ごせるように絆づくり、居場所づくりを一層推進する。

校内別室における支援について

不登校生徒の状況

1 学期から欠席が続き、2 学期が始まると在籍学級の教室には入れなくなった。対象児童は在籍学級の教室に戻りたいという気持ちがあるものの、教室に戻るきっかけをつかめないままている。当該児童は学習が遅れることを心配している。

具体的な取組

○当該児童の気持ちに寄り添った支援
「教室に戻りたい」という気持ちに寄り添いながら、まずは校内別室に登校し、安定した登校を目指している。

支援員が見守りながら、苦手な教科の学習に取り組み、自信がもてるようにする。

○支援員等とのコミュニケーション
学習支援だけではなく、支援員と会話をしたり、一緒にボードゲームなどをしてすることで、コミュニケーションを図り、信頼関係づくりを行っている。

必要に応じて、養護教諭や SC が悩みを聞き、相談支援を行っている。

○支援員と学級担任との連携

情報交換ノートを作成し、複数の支援員同士および担任・学年教員と生徒の様子を共有できるようにし、支援に生かしている。

また、生徒も利用時に何をしたかを記録し、振り返ることができるように工夫している。

○校内別室の環境整備

玄関に近い場所に別室を設けることで、利用生徒が通いやすいようにしている。また別室内に仕切りを設け、周囲が気にならないようにしている。



成果

学校に対する不安が軽減され、少しずつ一人でも登校できる日数が増えてきた。

登校日数が増えてきたことにより、自信が付いて、校内別室での活動に前向きに取り組む様子が見られるようになってきた。

課題

支援員がいる開室時間が午後であり、午前中の支援を十分に行うことができないため、支援員の配置の工夫が必要である。

生徒一人一人のニーズに応じた校内別室における支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校4年生から不登校となり、中学校入学後、中学校1年生の間は全く登校できなかった。2年生の2学期から、学校と家庭の支援員のサポートにより、校内別室に週3日登校できるようになってきた。現在の3年生では、校内別室指導支援員の配置により、毎日校内別室に登校し、給食を食べて、午後まで学校で過ごしている。

具体的な取組

○支援員や他の生徒等との関わり

支援員や他の生徒、SCとのコミュニケーションを図ることにより、安定して登校ができるようになってきた。また、支援員と給食を一緒に食べることで、午後まで学校で過ごせるようになってきた。

在籍学級との関わりも大切にし、当該生徒と相談しながら、興味のある教科から教室の授業に参加することができている。

○校内および関係機関と連携した校内別室運営体制

複数の支援員がいるため、生徒の様子を情報共有しやすいように記録のノート等を活用して、連携を図っている。

家庭環境に課題を抱えている生徒については、利用時に関係機関と連携し、面談を定期的の実施している。

○SCとの小集団支援でコミュニケーションを学ぶ取組

SCを交えた小集団での雑談の中で、適切な言葉遣いや感情の表出を学ぶ。無理のない過ごし方で行っている。



○自分で決めた体験学習等の学習課題に取り組むことができる支援体制

支援員等とコミュニケーションを取りながら、当該生徒が興味のある体験学習等の学習課題を決め、意欲的に取り組んでいる。

成果

5人の生徒の居場所となり、一人一人のニーズに応じた支援を行うことができた。複数人いたことで、校内別室内で下級生と上級生のコミュニケーションが生まれ、互いにより影響があった。また、徐々に教室での授業に参加する生徒も出てきた。

課題

今後も利用生徒が自立できるよう継続して支援していく。環境面では、場所の不足と支援員確保が課題である。

校内別室の取組について

不登校生徒の状況

現在、校内別室を利用している不登校生徒は、9月から月1日登校することを学級担任と決め、定期的に校内別室に登校できており、支援員や他の生徒とコミュニケーションを取りながら校内別室で過ごすこともできている。

具体的な取組

○登校の習慣化

給食の時間も、支援員や他の生徒と会話しながら食事を楽しむことで、信頼関係を築いている。

登校した際には、学年教員に出席したことを報告し、給食の時間には給食を支援員と一緒に在籍学級に取りに行くなど習慣化を図っている。また、登校日や時間を相談しながら調整している。

○学習の個別目標の設定

定期考査の校内別室受験を実施したり、在籍学級での学習進度を共有し課題に取り組んだりするなど、個別の目標に合わせて、時間割や課題を設定している。



○小集団活動の時間の設定

午前中は学習に取り組み、午後は小集団活動を行うなどメリハリを付けている。小集団活動では、カードゲーム、ボッチャ、ダーツ等のコミュニケーションが必要な活動を通して協力することや、自分の思いを伝えることを学んでいる。

○コミュニケーショントレーニング

同学年同士で国語等の学習時間を設け、互いの意見を受け止め、自分の意思を表現するコミュニケーショントレーニングを繰り返し行っている。支援員が生徒の間に入って、認め、励ます声かけを行い、自己肯定感を高めている。

成果

安定して毎日登校できる生徒が増加した。5人中3人は校内別室に定期的に登校できるようになり、うち1人は在籍学級の教室の授業にも参加できた。個別の目標を決め、校内別室で定期考査を受けるなど、目標達成を繰り返すことで、達成感を得られ、登校や学習への意欲につながった。

課題

他の生徒に会うことが苦手な生徒もいるため校内別室以外の場所で活動する際は活動場所の配慮をして、対人関係の構築ができるよう支援していく。

校内別室における支援について

不登校生徒の状況

集団に入ること、過ごすことが苦手である。週 1 回、スクールカウンセラーとの面談を受けており、面談後に校内別室を利用している。支援員と 1 対 1 で接すると、会話も弾み、自分のことを話すなどコミュニケーションができる。

具体的な取組

○対話と自習の選択

1 回目の利用時のみ、副校長が利用方法やルールと、「対話」か「自習」の希望を当該生徒に確認している。生徒が不安なくほっとできる居場所となるように、一人一人の自主性を重視した取組を進めている。2 回目以降は一人 1 台端末を活用して、利用希望を確認している。

○支援員主体の取組

校内別室は、今年度から開室したため、ポスター、自己紹介カード、出勤退勤表、その他支援に必要なものを支援員同士が話し合いながら準備してきた。支援方法や内容についても、支援員同士で考えることで、支援員の主体性を尊重し、利用する生徒への対応力を高めている。

○多様な支援員による支援

部活動指導員や地域の支援員を採用することで、これまでの学校での人材を活かして支援を行うことができている。また、複数の支援員を午前と午後に配置することで、生徒は自分に合った支援員と活動することができ、つながりが生まれている。



○設置場所の工夫

他の生徒とは異なる動線で校内別室に安心して登校できるようにするとともに、教室とは違う雰囲気のある居場所になるように設置場所を工夫した。

成果

不登校傾向がある生徒への対応の一つとして、校内別室を選択できるようになり、早期支援につながった。今年度は 10 人以上の生徒の居場所になっている。

課題

校内別室の目的が教員、保護者、生徒の共通認識を図り、目的を明確にして利用できるようにすることが課題である。